The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ホーソンの「ヤング・グッドマン・ブラウン」と曖昧性
Author(s)	舟阪, 洋子
Citation	大阪外国語大学学報. 1973, 29, p. 155-163
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ホーソンの「ヤング・グッドマン・ブラウン」と曖昧性

舟　阪　洋　子

Hawthorne's "Young Goodman Brown" and its Ambiguity

Yoko Funasaka

The purpose of this essay is to see what is ambiguous in "Young Goodman Brown" and how it is ambiguous, by explicating the short story. We will see that it is important, in reading Hawthorne, not to try to solve the ambiguity but to accept it as it is.

1

ホーソンの「ヤング・グッドマン・ブラウン」("Young Goodman Brown") については，既に充分の論議がなされてきた。それはこの作品が，皆の一致して言うようにホーソンの短篇の中での最高傑作であるからだろうが，もう一つの大きな原因は，これが「曖昧」な結末を持っているからである。ホーソンはこの物語の終り近くで，「グッドマン・ブラウンは森の中で眠ってしまって，恐ろしい悪魔の集まりの夢を見ただけなのだろうか。そう考えたいのなら，そういうことにしておけ」と，一見無責任な調子で読者に語りかけている。そして，それを現実と思うか夢と思うかで「ヤング・グッドマン・ブラウン」の解釈が二様に分れるのである。単純化して言えば，この悪魔の集まりを現実と考える人は，ここに登場する人は皆悪に汚れた人で，グッドマン・ブラウンはすべての人間に内在する悪を知ったのだと解釈し，夢と考える人は，この人々は決して悪人とは限らず，グッドマン・ブラウンが悪だと信じこんでいるだけだと言い，十七世紀のセイレムで，無実の人々を魔女として処刑していったあの謹厳なピューリタンの判事たちを引合いに出したりする。最近は後者の意見が，歴史的・文献的証言も加わって，圧倒的な強みを見せ，[1] 今では夢であったという意見が当然のこととして受け入れられている。

私はこの意見に反対する気は，全くない。現実の物語として読むには，あまりにそうでないと

暗示する言葉や文章が多すぎるのである。多分，グッドマン・ブラウンは夢を見ていたのだろう。しかし，いったいこれを夢だと，又はそうでないと，決めてしまう必要があるのだろうか。「夢を見ただけなのだろうか」という問は，ホーソンにとって，後世の私達が考える程の大きな意味を持っていたのだろうか。当人のグッドマン・ブラウンにとっては勿論，ホーソンにとっても，どちらでもいい問題，いや，ホーソンにとっては，どちらと決めてしまいたくない問題だったのではないだろうか。

こういうホーソンの曖昧性を考える為に，いろいろの意味でこの作品と似通ったところのあるヘンリー・ジェイムズの「ねじの回転」(“The Turn of the Screw”) を思いおこしてみるのも無駄ではないだろう。「ねじの回転」に関しては，「ヤング・グッドマン・ブラウン」と全く同じように，対立する二つの解釈がされてきた。一つは，家庭教師の見た幽霊は実在するのであり，二人の子供は幽霊＝悪に脅やかされており，家庭教師が子供たちを救うのだ，とする解釈で，もう一つは，家庭教師は，性的欲求不満によるノイローゼ患者で，幽霊もその幻覚にすぎず，従って子供たちは，悪の影響を受けているわけはないのだ，とする解釈である。[2] そして，これも「ヤング・グッドマン・ブラウン」と同じように，最近は，後者の解釈をとる人が圧倒的に多くなっている。もっとも，この場合は，ホーソンの作品のような歴史的・文献的証明が出来ない為に，今だに一抹のわりきれなさを残しているのだが。

さて，ヘンリー・ジェイムズの「ねじの回転」をこのように曖昧にしているのは，作者の書き方だ，と言ってもいいだろう。彼はこの物語を家庭教師の手記として，一人称で語らせる一方，その家庭教師の人物について，彼女が田舎出の世間知らずの娘であり，能力以上の大役をまかされて興奮していたこと，しかも彼女は，その雇い主に恋していたこと等，つまり，彼女がいかに「信頼出来ない語り手」になりうるか，ということを示唆するような事を，別の語り手に語らせているのである。こういう家庭教師の人物描写を読み，彼女の置かれた状況を考えてみると，彼女が神経症で，妄想を抱いた結果幽霊の幻覚を見たのだ，つまり，ジェイムズは，この作品で，彼の小説にしばしば登場する「精神的欠陥を持ったアングロ・サクソンのオールド・ミス」[3] の心理を描いてみせたのだ，ということで，まことにあっさりと片付けられるのである。しかし，実際に私達が「ねじの回転」を読んだ時に感じるあの恐怖は，どう解釈したらいいのだろう。それは，家庭教師が，幽霊を見た時，又，子供たちが幽霊と会っているのではないかと疑った時に感じる恐怖であり，そして，ひょっとして自分は間違っているのかもしれないと気付いた時に感じる恐怖でもあり，更には，彼女が自分が正しいことを遮二無二証明しようとマイルズに迫ってゆく時に，今度は私達が彼女に対して抱く恐怖でもある。つまり，彼女にとっても，そして彼女の手記に没入して読み進む私達にとっても，それは「分らない」という恐怖なのだ。ジェイムズは，純粋な幽霊物語を書くには，あまりにソフィスティケイトされすぎていた。しかし，それでも，幽霊を使って悪のテーマを描くという可能性も，捨てていたとは思えない。そこで，彼は，語り手は精神が惑乱していたかもしれない，という一つの解釈の方向を明らかにしつつ，尚，家庭教師の悪への恐怖，そしてそれが実は存在しないかもしれないという曖昧の恐怖を，読者に伝えようとしたのである。これこそ，人間の心理を冷静に見つめながら，常に「崩壊の感覚」をい

だき，「悪」を描き続けたジェイムズだった，と言えるのではないだろうか。ジェイムズにとって幽霊が実在したかどうかという問題は，あまり問題にしてほしくないものだったのに違いない。

この「ねじの回転」についてと似たようなことが，「ヤング・グッドマン・ブラウン」についても言えるように思う。勿論，ホーソンの作品は，ジェイムズのと違って，はっきりと「全智の作者」の立場で書いてある。作者と登場人物グッドマン・ブラウンの間には，明確な一線が引かれ，私達は常に作者の言葉を通して，グッドマン・ブラウンを見ることになる。確かに，作者は多くの場合グッドマン・ブラウンと同じ位置にいるが，それでも，作者はグッドマン・ブラウンの見通せないことを見ることが出来，皮肉っぽい口調でブラウンを語る権限を与えられているのである。それでは，何故，この作品の中に曖昧さがあらわれ，正反対の解釈がされるようになったのだろう。ここに，私達は，ジェイムズの場合と同じように，ホーソンにも，曖昧な印象を生み出そうとする意図があったことに，気付くのである。唯，ホーソンの場合は，ジェイムズと違って，その曖昧さは登場人物とは離れたところに存在しているように思える。グッドマン・ブラウンは，ジェイズムの家庭教師のように曖昧を前にして迷い悩むという心理を経験していない。それは，一つには，ホーソンの書き方がアレゴリー的で，ジェイムズの心理を重視する書き方とは決定的に違っていたということも意味するが，もう一つには，ホーソンの作品の中に見られる曖昧性は，ホーソンの人生観の一部として生れてきているからだということも考えられる。ここで，ホーソンが何を意図し，この作品に見られる曖昧性とはどんな性質のものなのか，を考えてみたいと思う。

2

いったい「ヤング・グッドマン・ブラウン」で何がおこるのか。この全く単純な問題が，実は，最も多くの議論を引きおこして来た。しかし，ホーソンがこの物語をどう書いたか，という問題はとも角，グッドマン・ブラウンが自分に何がおこったと考えているか，ということは，比較的簡単に述べられるのではないだろうか。[4]

若きグッドマン・ブラウンは，ある日の夕刻，ある悪しき約束を果たす為に，妻フェイスのとめるのも振り切って森へ出かけてゆく。新妻を心配させるのには気がとがめるが，今日一日ぐらいこの約束を果たす為に出かけても，この後充分に精進すれば天国に行ける，と信じている。しかし森に入り，突然蛇のような杖を持った約束の相手が現われると，彼は急に怖気づき，いろいろの理由を述べたてて引き返そうとする。彼は，こんな悪いことをしたら，先祖代々信心深いブラウン家の名折れになるとか，牧師に合わせる顔がないとか，何よりもフェイスを心配させてはいけないからとか言ってみる。しかし，それらは皆いかにも弱い議論であり，相手に言葉巧みに誘われては，つい，ついてゆくのである。しかも，悪魔の誘いは更に巧妙である。彼が信じて疑わなかった人々が，次々に悪魔，魔女になって登場して，彼の信念を突きくずし，彼を絶望へと導いてゆく。彼に教義問答を教えてくれたクロイスおばさんも，牧師も助祭も，森の奥へ急いで

ゆく。そして，彼が最後の頼みとしていたフェイスさえもが，ピンクのリボンを一つ彼のもとに落として行ってしまうのだ。彼はついに絶望し，天を見捨て，本能のおもむくままに，森の奥に突き進んでゆく。すると，彼はその奥で人々の集まっている光景に出会う。聞き情れた讃美歌のメロディーが流れ，祭壇に灯りがともり，そして「厳粛な黒衣の人々」(p. 38) が，ぼんやりと見える。場面が森の中であり，信仰深い人々の間に，悪漢どもや，インディアンまでが混じっているのが奇異ではあるが，それを除いては，これは，いつもの教会の雰囲気である。グッドマン・ブラウンの胸に希望が戻ってくる。しかしそれと全く同時に，彼は真相に気付くのである。これは形式こそ教会のミサと同じだが，本当は悪魔のミサなのだ。耳情れた讃美歌も，気がついてみると，口にするのも恐ろしい詞をつけて歌われているのだ。この悪への恐怖をもって，彼は悪魔の最後の誘いを振りきるのである。今まさに悪の洗礼を授けられんとする彼は，同じく洗礼を受けようとしているフェイスに向かって「悪をしりぞけよ」と叫ぶのである。

グッドマン・ブラウンにとって話は簡単である。結果として，明らかに悪を拒否したのは自分だけであり，しなかった人々は皆，牧師も，フェイスでさえも，悪に汚れた人なのだ。目がさめて（夢だったのか？しかし彼にとっては夢でもどうでもいいのだ。それは，彼にとっては，強烈な現実感を伴なった経験だったのだから），彼がセイレムの町に帰ってくると，人々はいつもと変りない信仰深い生活を続けている。しかし彼はその人々の真実の姿を見てしまったのだ。彼はその人々を避け，あのいまわしいピンクのリボンをつけたフェイスを押しのけてしまう。そして彼は，自分だけは罪なきもの，選ばれたものと自負し，人との接触を忌み嫌い，崇高なる孤立を保って死んでゆくのである。

もし，グッドマン・ブラウンが「ねじの回転」の家庭教師のように，語り手になっていたら，恐らく以上のようなことを述べていたであろう。しかし，初めにも述べたように，「ヤング・グッドマン・ブラウン」は明らかに，作者＝語り手の口から語られており，この語り手の目は多くの場合，グッドマン・ブラウンの視点の位置にあるとはいうものの，彼の気付かないことを見通しており，これを，皮肉，直接的な説明等によって，読者に教えてくれるのである。従って，この物語の意味は，語り手＝ホーソンが，グッドマン・ブラウンをどう解釈したか，というところに求めなければならない。

最初に，ホーソンがフェイスをどう解釈したか，という，より簡単な問題を考えてみよう。フェイスはいつもピンクのリボンをつけてあらわれる。最初の一頁程の間に三回（「帽子についたピンクのリボンを風になびかせて」p. 26,「『では神の恵みがありますように』とピンクのリボンをつけたフェイスが言った」p. 26,「ピンクのリボンにもかかわらず憂うつそうな様子で」p.27）この「ピンクのリボン」があらわれて，私達に，ピンクのリボンとフェイスの関係を印象づけた後，クライマックスでもう一度使われ（フェイスの声が消えた時,「何かが空中を軽やかに舞い下りてきて，木の枝にひっかかった。グッドマン・ブラウンがそれをつかんでみると，ピンクのリボンだった」p. 36）そして，結末の部分で最後にあらわれる（「礼拝所の角を曲がると，彼はピンクのリボンをつけて，心配そうにこちらの方を凝視しているフェイスの頭を見つけた」p. 43)。このピンクのリボンは，F・O・マシセンがこだわったように，[5] 多分ホーソンはシンボルとして

使ったのだろう。そして，それは恐らく，「悪」の象徴としてではなく，[6] 新妻の清純さを示すためのものだったのだろう。何故なら，ホーソンは，「フェイス，と妻はいかにもふさわしい名が付けられていた」(p. 29) と，冒頭で書いているからである。これは，グッドマンという名が最後まで，その名に皮肉っぽい意味合いを漂わせているのとは対象的である。とも角，それが何の象徴であれ，ホーソンがこの「ピンクのリボン」という同じ言葉を，こうもわざとらしく繰り返し使ったのは，ホーソンのフェイス観—フェイスはその名の通り信仰を持った人間—が変わっていないのに，夫グッドマン・ブラウンの見方が変っていったということを示したかった為だろう。グッドマン・ブラウンにとって，このリボンは幸わせの象徴から悪の象徴へと変ってゆくのであり，それに伴なって，フェイスは，最後の心の支えとなる最愛の妻から，ついその胸から逃げ出したくなる汚れた人間へと変ってゆく。このように，私達は常に，この，ホーソンとグッドマン・ブラウンとの間にある距離に気を付けなければならない。ホーソンは，十九世紀の小説家に多い，すべてを知り，結末までも見通した語り手という立場に立って，この物語を書いているのだ。

一つの，そして，この物語の意味と密接なつながりを持つ例をあげてみよう。グッドマン・ブラウンが森へ入ってゆく時，行きたいという気持が明らかに勝っていることを，ホーソンと私達読者はよく知っているが，グッドマン・ブラウン自身は，あまり意識していない。行ってはいけないと思いながら，「今晩だけは許してもらって，これからはフェイスのスカートにすがって，天国までもついてゆくのだ」(p. 27) と，虫のいいことを考えて足を急がせる。これについてホーソンは「グッドマン・ブラウンは，将来に関して，こういう賞讃すべき決心をして，現在のこの悪しき目的を果たす為に，より足を急がせることを正当化した」(p. 27) と言って，この「賞讃すべき」という言葉に，ひやかしをこめている。そして蛇の杖を持った男に，「さあ，歩きながら話そうよ。まだ森に入ったばかりなのだから」と言われると，「『いや，入りすぎましたよ』と叫びながらも，善き男は無意識に歩き出す」(p. 29) のである。この「善き男」という言葉に皮肉が感じられないだろうか。いや，ホーソンは，もっとはっきりと，グッドマン・ブラウンの行きたいという気持に言及している。

> 彼らは歩き続け，その間，年取った方の男が，グッドマン・ブラウンに，急いで，この道も我慢して先に進め，と説得した。すると，その説き方があまり上手だったので，この言葉は，彼が言ったというよりも，それを聞くグッドマン・ブラウンの胸の中から出て来たようにも思えた。(p. 33)

このように，グッドマン・ブラウンがいかに行きたくないと言っても，森の奥へ行きたいという気持，つまり，悪への衝動は明らかにあるのだ。だから，彼は，フェイスも行ってしまったと思い，行ってはいけないとする気持の束縛から離れた時，「彼自身がその森の中でも最も恐ろしい姿」(p. 37) となって，森の奥へ突き進んでゆけるのだ。この場面では，ホーソンは遠慮なく語り手として登場し，グッドマン・ブラウンの悪の姿を描いてみせる。

実際のところ，この悪魔に憑かれた森の中でも，グッドマン・ブラウンの姿ほど恐ろしいものは何もなかった。(p. 37)

そして又，現在形で一般化して，次のようにも言う。

悪魔の姿をした悪魔よりは，人間の心の中で荒れ狂っている悪魔の方が，よほど恐ろしいものだ。(p. 37)

しかし，実のところ，ホーソンはここで，グッドマン・ブラウンの悪への衝動を描いて，彼を告発しようとしていたわけではない。何故なら，ホーソンは，この衝動が実は「人間というものを悪へ導びく衝動」(p. 37)，つまり，人間には共通に存在するものであるということを，充分に承知しているからである。だから，ホーソンにとって問題なのは，グッドマン・ブラウンが悪を秘めた人間であった，ということよりも，こうまで明らかだった悪の衝動を，彼がどうしても認めようとしない，ということなのだ。確かに彼は森の奥で会った悪しき人々の群に，「心の中の悪の部分が共感して兄弟意識」を感じる。しかし，それは，あくまでも，彼にとって「おぞましきもの」なのだ (p. 40)。彼は，自分も，そして他の人も皆，悪を内包した人間だ，という意識になりきることが出来ず，他人の悪ばかりを意識して，自分だけは最後まで悪に抵抗したと思い込むのである。そして，このグッドマン・ブラウンの姿をこそ，ホーソンは悪の姿と考えていたのではないだろうか。彼は次のように書いている。

ここで悪魔は手を浸し，彼ら（グッドマン・ブラウンとフェイス）の額に，洗礼のしるしを与えようとした。彼らが罪の神秘の共有者となり，行動に於ても考えに於ても，自分自身の罪よりも，他人の隠れた罪の方をより多く意識するようにと。(pp. 42—43)

ホーソンにとっての最大の罪は，決して人間全般に共通する悪というのではなく，他人の心の中をのぞきこみ，詮索し，「人間の心の尊厳」を踏みにじる「緋文字」のチリングワースの罪だったということを思い出してもいいだろう。

しかし，又，ここでグッドマン・ブラウンの「許されざる罪」を描くだけがホーソンの目的だったわけではない。何故なら，彼は最後に，「これは夢だったのかもしれない」と，グッドマン・ブラウンの経験全体を，ぼかしてしまうからである。もしこれが夢だったら，例えば彼が翌朝，クロイズおばさんに教義問答を教えてもらっている女の子を，まるで悪魔から引き離すというように，大真面目で連れて逃げてゆく光景などは，滑稽とさえ，言えるのではないだろうか。ホーソンは，この作品に，曖昧をもち込むことによって，グッドマン・ブラウンの一人合点，愚かしさを描き，ホーソン自身の人生への態度を，あわせて，あらわそうとしているのではないだろうか。ここで，もう少し，「ヤング・グッドマン・ブラウン」に於ける曖昧さと，結末の意味

を考えてみよう。

3

「ヤング・グッドマン・ブラウン」では，F・O・マシセンが，「緋文字」について「多項式選択の手法」と呼んだようなもの[7]が，結末の「夢か現実か」という問ばかりでなく，全編を通じて，随所に見うけられる。最初から見てみると，グッドマン・ブラウンが約束の相手に会った時，その男の杖は，蛇のように動いているように見えた。しかし「勿論，これは，あたりが薄暗いということもあって，目の錯覚だったのに違いない」(p. 28)。又，その男が，その杖を，クロムズおばさんに投げ与えると，それは生き物になった。「しかし，この事実を，グッドマン・ブラウンは確認することは出来なかった」(p. 32)。又，牧師と助祭が森の奥へ出かけていった時，実は，「その場所が特別に暗かったからであろう，そこを通る人も馬も見えなかった」(p. 34) のである。そして，彼が森に出かけるフェイスの声を聞く時も，その声は「嘆いているようではあるが，悲しんでいるかどうか，はっきりしないし，何か頼んでいるようではあるが，その頼みは，かなえてほしくない，といったような」声である (p. 36)。さらに続ければ，グッドマン・ブラウンが森の奥で教会の集まりらしい人々を見た時，「暗い野原に突然光が輝いたので，グッドマン・ブラウンの目がくらんだのかもしれないが，彼は，その特別の高潔さでセイレムの町でも有名な教会の信徒を二十人程も認めた」(p. 39)。そして，最後に，彼が「フェイス！フェイス！天を見上げて，悪をしりぞけよ」と叫んだ時，「フェイスが彼に従ったかどうか，彼は知らない」(p. 43) のである。

これ以外にも，似たような例はいくつか認められる。しかし，どの場合にも，これらの文章は，グッドマン・ブラウンが，ある現象を，本当に見たのか，それとも幻だったのか，どちらかに解釈せよと言っているわけではない。この意味では，F・O・マシセンの「多項式選択」という言葉は，少くとも「ヤング・グッドマン・ブラウン」に関しては，誤解を招くかもしれない。ここでは，これらの曖昧な文章は，あくまでも，現実であったのか幻であったのか分らない，ということのみを意味しているのである。ところが，グッドマン・ブラウンは，牧師と助祭が本当に悪魔の集まりに出かける姿を見たわけではないのに，それを確信し，フェイスが悪を受け入れたのか拒んだのか分らなかったのに，受け入れたと信じ込むのだ。そこで彼は翌朝，牧師が彼に祝福を与えると，まるで呪いを避けようとするように，その牧師から離れてゆき，あのピンクのリボンをつけたフェイスが，彼の無事を知って喜びのあまりキスしようとすると，彼は彼女の顔を睨みつけて，口もきかずに行ってしまう。しかし，読者は，ホーソンがこの牧師のことを「年老いたよき牧師」，そして「尊き聖者」と呼び (p. 43)，フェイスを最初と同じ言葉で紹介していることに気付かなければならない。グッドマン・ブラウンは，とんでもない間違いを犯しているかもしれないのだ。

さて，グッドマン・ブラウンがこの曖昧な現実を前にして，断固として一つの解釈—人間はすべて，自分を除いては，悪であるという解釈—を選んだとすれば，ホーソンはこの曖昧を，あく

までも曖昧として，残そうとしている。何故なら，ホーソンにとって，曖昧とは現実の真の姿そのものだったからである。R・H・フォーグルは「ホーソンの小説—光と影」という本の中で次のように言っている。

> 人間は悪であり，そして同時に善である。どちらか一方，ということではなくて，どちらも両方，ということに意味がある。……彼は結局論理で妥協させようというのではない。何故なら，彼は存在の神秘をそのまま受け入れるからだ。[8]

従って，ホーソンの曖昧性は，マシセンの言うように「手法」だったのではなくて，「彼の考え方の特徴」にすぎなかったと言っているのは，[9] 正しいと思う。ホーソンに言わせれば，この物語はひょっとして夢ではなくて，牧師もフェイスも悪魔の仲間だったのだという可能性も残っているのだ。人間には誰でも悪の部分がある。しかし，悪魔が言うように「悪が人間の本質で，悪のみが汝らの唯一の幸わせとならねばならない」(p. 42) という考えはホーソンはとらないし，又一方，グッドマン・ブラウンのように，人間は善のみでなってなければならないと考えていない。人間は，善でもあり悪でもあるという曖昧な存在であり，この考え方を拒否すれば，グッドマン・ブラウンのように，いったん他人の悪に気付くやいなや，その人を人間とは認められなくなり，更に大きな罪を犯すことになってしまうのだ。

グッドマン・ブラウンという名は最後まで皮肉である。彼はこの大きな罪を犯しながら，それに気付かない為，表面だけはまさに「善き人」として生涯を送るのである。彼は周囲の人すべてを悪に汚れた人として恐れ，全く孤立して，しかし自分だけは悪を犯すまいとして立派なピューリタンの生涯を送ったであろう。しかし彼が幸福になれなかったのは，そして彼の死の時が暗いものであったのは，人間の心の尊厳を認めず，悪をも含んだ人間として受け入れ，愛すことが出来なかったからである。ホーソンは，恐らく，グッドマン・ブラウンを批判していないが，同情も寄せていない。彼はあくまでも冷静に距離を保ち，自分の人生観をもって，別の生き方をしたグッドマン・ブラウンを，ある時はアイロニックに，ある時にはユーモアさえもって，描いてみせたのである。

ヘンリー・ジェィムズは「ねじの回転」で，やはり他人を悪だと思ってしまった家庭教師を描いた。彼は作者としては全く姿を見せずに，家庭教師に語らせた為，彼女の恐怖が作品を支配し，私たちはそれに巻きこまれた。しかしホーソンの作品では，グッドマン・ブラウンが曖昧に直面して悩んだわけではない。フォーグルは，このテーマが「疑うということの恐怖」だとしているが，[9] もしそうだとすれば，その恐怖は，グッドマン・ブラウンのもの，というよりは，ホーソンのものだったろう。ここでは，ホーソン自身が曖昧さを作り出し，それをそのまま読者に投げ出しているのである。ホーソンにとって，その曖昧さは解決してはいけないものだったし，それよりも人間には解決出来ないこと，分らないことと，彼は思っていたのかもしれない。

Notes

(1) 歴史的なものとしては，David Levin の "Shadows of Doubt: Spector Evidence in Hawthorne's 'Young Goodman Brown'," *American Literature* (Nov. 1962) 344—52 が十七世紀のセイレムでの魔女裁判との関連の上で，この作品が，グッドマン・ブラウンの幻覚を描いていると論じ，文献的には，F. N. Cherry が "The Source of Hawthorne's 'Young Goodman Brown'," *American Literature* (Jan. 1934), 342—48 で，この作品とセルバンテスの「犬の話」との関係を突きとめ，ホーソンが，悪魔の集まりは夢と変りないということを知っていたことを明らかにした。

(2) 典型的な例をあげれば，前者に Robert Heilman, "*The Turn of the Screw* as Poem," *A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw"* (New York, 1960), pp. 174—188 があり，後者に Edmund Wilson, "The Ambiguity of Henry James," *op cit.*, pp. 115—153 がある。

(3) Wilson, *op cit.*, p. 121.

(4) テキストは研究社小英文叢書 *The Birthmark and Other Tales* 中の "Young Goodman Brown" を使用した。この本からの引用文のページ数は，すべて本文内に記す。尚，ここの序文，註釈から判断する限りでは，編者高村勝治氏の解釈と私のは全く違っているということを付記しておく。

(5) F. O. Matthiessen は *American Renaissance* (New York, 1941) で "Only the literal insistance on the damaging pink ribbon obtrudes the labels of a confining allegory" (p. 284) とけなしている。

(6) 高村勝治氏は，このテキストの註で，pink ribbons は「厳格な日常生活に満足出来なかった Faith の罪の symbol となっている」(p. 89) と言っている。

(7) "Device of multiple choice." Matthiessen, *op. cit.*, p. 276.

(8) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (Norman, 1952), p. 7.

(9) *Ibid.*, p. 21.